

## ほねおりバナナ

\*\*\*\*\*

「よつこら、しよい、つと」

「おかえりマジヨリカ！ 今日はどうだった？」  
魔女界の扉を抜けてそおつとMAHO堂に戻って  
きたわしを、白い服が迎えてくれよるわい。

大きな目に、期待をいっばいたためて、のま じゃ  
からそおつと帰ってきたのじゃが。

ま、

「なんもなし、じゃ。さあ、もう眠る時間じゃぞ？」

いつもどおり、ハナを寝かしつけるのはわしの役  
目じゃ。

「うん。おやすみなさ〜い」

パタパタ、二階が上がっていく音は元氣じゃが、わ  
しにはわかる。

「こつ長く続いてはな、期待はずれが」

応えるまえに一拍だまった顔が、なんども頭への  
こるのま

二階のハナの部屋から音がしなくなってから、わ  
しはダイニングの椅子に腰をおろした。

菓子用の道具だらけのキッチンをぼんやり眺めて  
おると、そこにあいつらが居らんのが不思議な感じ  
じゃ。夜中だから、当然なのじゃが それだけで  
はないのま——

あいこが怪我して、はづきが実力差を見せつけら  
れて。強くふるまってはおるが、疲れておるのは確  
かじゃ。どれみさえも忙しくなった今となつては、動  
けるのなぞわしらだけ、じゃな。

「高校も2年ともなれば、未来も見えてくる頃じゃ。  
仕方のないことではあるかのま」

ま、こんな時期まで魔女見習い育てとる魔女なん  
ざ、例がない、か。そこへもつてきて、ハナの妹  
ユメ探しなんぞアテもなく連れ回したら潰れてしま

### 3 ほねおりバナナ

うわい。みな、M A H O 堂に来るたび気にしておるのわかるが ああ、テーブルの上にバナナが置きっぱなしじゃ。ももまで疲れとるのかのお。

「ふん。あー もぐ」

わしはバナナをひとつもいで皮をむくと、半分ばかり口に入れた。

ももの選んだバナナじゃ。まづいはずがないが  
疲れた身体からだには、チヨコの方がうれしいかの。

魔女界の主だった面々にはすべて目通りした。元老院の方々も、ハナのためなら、と言うてあちこち号令かけてくれたんじゃが、だれひとり知っておらん 知ったかぶりならひとりおったがな。まったく、マジヨルカのヤツめ

「ふう。これも師匠の仕事かのお。老骨がきしむわい」  
階段を見上げるわしの背中に、小さい手の感じがした。

ララにも苦勞かけておるのぉ じゃが、

「ララ、次は誰じゃったかな？」

バナナを喉に流し込んで、わしは訊いてみた。

「そうねえ、元老院の方々は全部終わっちゃったし、あとは あ、デリが魔女界に帰る日だわ」

「デリか、問屋魔女じゃな。あいつらは世界中の魔女と付き合があるから情報は期待できるんじゃがとにかくがめついいからのお。ちと挨拶させてもらおうとしただけなのに、デラから大金ぶっかけられたくらいじゃ。」

それでもなんとか、妖精付き合いでアポ取り付けたのじゃからな。ララには感謝しとるわい。これがひと段落したら、温泉でゆっくりさせてやるか

「ん？ 温泉？」

なにか、思い出した気がするんじゃが、気のせい  
か？

\*\*\*\*\*

「縁日だよ、縁日！」

大声のだんご頭が飛び出てできたのは、その次の日の放課後。菓子がだいたい売り切れた頃じゃった。

「縁日がどうした？ その丸い頭に醤油でもつけて焼いてもらうか、どれみ？」

「だーかーらあ、団子じゃないって！ シニヨン！ ちゃんと覚えてっば！！」

「あー、話それてんで、どれみちゃん でな、マジヨリカ。今晚、お寺で縁日やるそうやから、八ナちゃん連れて行ってええかて、聞きたかつたんや」

ああ、なるほどな。

どれみはまだ不満げな顔しとるが、まあいいわい。

そうか、縁日か

「八ナ、行くか？」

もう客が来ても売るもんも少ない、いい頃合いじゃ。

こここのところ、ユメの手がかりもなくてたまっとる

じゃろっし、早じまいもよかるうて。

八ナも小さかった頃は、行きたがってたしのお。二

つ返事でうん、と おや、言わん、な？

わしが首か上げて見てみると、

「う〜〜ん」

頭かかえてうなつとる。なんじゃ、いったい？

「八ナちゃん、行きたくないの？」

見かねたララが助け舟だしよった。それでも頭か

ら手を離さんな。 ははーん、ひよっとして。

「わしとララならまた魔女界に行つておるから、こ

こはからつぽじゃ。八ナは帰るまで縁日で遊んどれ」

わしが言つたら、白い服ががばつと起き上がったぞ。

「それじゃ、八ナちゃんダメっ子じゃない！！」

はあ？

「八ナちゃん、どうしたの？」

「だつてさ、マジヨリカ每晚魔女界でユメちゃん探

してるんだよ？ なのに八ナちゃん遊んでたら、ユ

メちゃんにあきれられちゃうよ！！」

5 ほねおりバナナ

あ、ああ なるほどのお。

「ハナヤ。わしがもしユメを探すのやーめた、なんぞ言つたら、お前はどつする？」

「え？」

「わしや疲れた。もうユメなんて知らん。勝手にどこへでも行つてしまえばよいわ と言つたらどうするかの？」

「え？ え?? えええええつ!!」

「おーお、のどの奥が見えるくらい大口ひらいて、目に涙ためとるわい。わしの耳元にはララがしがみついて抗議しとるし。あー、もうわかつたわかつた。

「それだけ期待しとるんじゃないや、わしらを信じらんじや。お前はお前のままいればよい。手伝つて欲しい時にはちゃんと言うから、そんなとき力を貸せ。いいな？」

「 っん」

「不承不承でうなずきおつたわい。それなりに、我慢というものを覚えたのかのお。 さて、ここは大

人の魔女の出番じや。

\*\*\*\*\*

「——やれやれ、今日も手がかりなし、か」

「魔女界からの扉を閉めながら、わしは思わず愚痴つてしもつたわい。大人の魔女の出番でも活躍できんのお、わしらは。

「ちら、とあたりを見たがだれもおらん。ふう、気苦労が絶えんのお。ま、それも我慢じや、ハナでさえ我慢を覚えておるのじやから

「ふん、まだあつたか」

「見回した目に、昨日とおなじバナナが映つた。菓子の材料じゃなかつたのかのお？ もっとも、ももがバナナを使うとケーキとかになるがな。わしはもっとこう、格好なんぞ気にせん駄菓子の子のくらいのがいんじやが

「ハナちゃん、おみやげいっぱい〜いっぱい買って

きたよお」

「と考えるとところに、爆弾が飛び込んで来おったわ。それじゃ、疲れた顔なんぞできんな。」

「早かったな。楽しんできたか？」

階段を降りながらのわしを待ちきれんようので、ハナがぼいっと魔法でジャンプしながら戦利品を見せってきた。

両手いっぱい抱えおって、まったくのあ、どれどれ わたあめ、りんごあめにあんずあめ、か。甘いものばかりじゃな ん？

「チヨコバナナ、か」

小指で掴んだ焦げ茶の棒を、ハナが器用にこっちに差し出しとる。

「うん。なんだか欲しくなっちゃったの。マジヨリカ、好きだったよね」

ふふふ。わしの機嫌でもとるつもりかの？ なら、ため息などはつかんようにせんとな。

それに、好物なのは本当じゃ。やはりこう、祭り

らしく安っぽくてガリツガリにチヨコかけたヤツでない、雰囲気がでんわい。以前もにも作らせたが、品がよすぎてのあ。バナナらしくないというのか――

「バナナやパイナップルもあるんじゃ。あたたかい場所はええぞい？」

ん？ 考えとつた頭ン中に、声が聞こえてきたぞ。ちよいと前にはよく聞いてた声じゃ。

バナナ、南国、あたたかい あああっ!!

「タケ〜っつ!」

わしが頭を上げた瞬間、小さな悲鳴が上がった。

「な、なによマジヨリカ!」

ララをふっ飛ばしてしまつたようじゃ。じゃが、それどころじゃないわ。

「タケじゃ、マジヨタケ! あやつを忘れとつた!!」

不思議なところから話を聞きつけてくる奴じゃからな。うわさ話に関しては問屋魔女はだし、ヘタを

すると魔法使った女王さままでも敵<sup>かな</sup>わんぞ。ああ、やつ  
の電話はなん番じゃったか」

ポケットに手を突っ込んで、出てきたメモをめくつ  
て おお、あったあった。が、番号が滲<sup>じ</sup>んで読め  
やせんぞ。そうか、番号聞いたのは、魔女界の温泉  
でじゃったからのお。

「たしかマジヨタケさんなら、LINEに名前で登  
録してたはずよ？」

「ララがわしの顔を覗き込んでそう言ったが、らい  
ん？ なんじゃらいんて??」

「ほら、前に温泉行ったとき、ジップロックで包ん  
で操作してたじゃない、スマホ」

「スマホあ？ ンなもん、普通の魔女がもつとるかー  
いっ!!」

「そノ、マジヨタケさんなら知ってルんだネ、ユ  
メちゃんのいるトコ？」

「面倒じゃから、読めそうな番号片っぱしからかけ

てやるわいっ!」と電話のボタンに手をかけた

とき、いきなり頭の上から声がした。なんじゃ？

「よおし、ハナちゃん、電話つなげちゃエッツ!!」  
見上げれば、黄色いブーツに帽子。ほうぎに乗っ

て、ふわふわ浮かんてる もも!!」

「うん、マジヨタケさんへのホットライン、つなが  
くれっ」

ハナの声と一緒に、受話器のむこうから声が聞こ  
えてきたぞ。

「もしもし、マジヨリカじゃが、聞こえるか？」

もうどこ見てもいいかもわからんが、成長したハナ  
の魔法じゃ、きつとタケにつながったはず

『——本日の営業は終了しとるぞい。明日<sup>あす</sup>にせえ、明  
日<sup>あした</sup>』

ぐお た、たしかにタケの声じゃが、そうか、も  
う夜中じゃったな。

「ハナ、タケはもう寝てしまったようじゃ。悪いが

明日またつないで。」

「明日ならいいんだ？ じゃあ、ねえ MAHO堂とマジヨタケさんだけ、明日になあれっつ!!」

な なんじゃとお!?

「そんなむちゃくちゃな魔法があるか、ハナ!! あん？」

耳にあてた受話器から聞こえてきたのは、タケの声じゃった。

「タケか？ マジヨリカじゃ。久しぶり いやそんなことはええんじや。ユメを知らんか、ユ・メ！」

あ？ じゃからユメ 夢じゃないわい！ 魔法を老人扱いしおって、お主の方がはるかにババアじゃろっつが!! っつと おお？」

いきなりわしの手から、受話器が離れたぞ？ そのまま上の方に っつて、もも!!

「Hello? My name is Momo. マジヨモンローとマジヨリカに育ててもらっつた、魔女見習いだヨ！」

な、な、な、なんじゃ、いきなり!?

「ご、ごらもも！ 電話を返さんか!!」

「アん、もうちよつと待って それで、マジヨアヴェニールさんのこと、知ってるノ？ うん、

Oh! Wonderful! すべMAHO堂に来て来て！ わたしたち、ごちそうするヨ♡」

来て来て なんじゃと!?

「よおし、ハナちゃん、Go!!」

「マジヨタケさくん、いらっつしゃい。」

ぐにやあ、っつと目の前が曲がった感じがしたと思ったら、

「ふおおあああ〜」

なんにもないテーブルの上に、驚鼻わしはなのちいさな婆さん——タケの身体が落ちてきよった。危ないっ!

「よいしょオっ！ よし、キヤッチ成功。」

飛び込んだきたももが、両手でなんとか抱えおつた。ふう、脅おびかしてくるわい じゃなくて！

「いきなりなにするんじやー！」

「だーってせ、マジヨリカ、こないだからずーっと

9 ほねおりバナナ

ひとりデぼそぼそ言つて。誰にも手伝わせてくれな  
いんだモン。

ワタシだって、ハナちゃんだって、マジヨリカの  
才弟子サンだよ」

ふん。

「自分に向かつて『お弟子さん』なんて言う奴がお  
るか」とと?」

まだ頭の上で浮かんだるももを怒鳴りつけてやる  
つかと上むいたわしの肩に、なにかのしかかつて、

「おお、これがごちそうかえ? わしやこれに目が  
ねえでなあ」

そのまま、わしの頭を乗り越えた驚鼻が、テーブ  
ルの上のチヨコバナナをつかみよつた。

「こりや、タケ!」

そのまま頭ごしに、ぱくりと一口じゃ。ああ、わ  
しの分がああ

「いやいやマジヨリカ、そう邪険じせけんにするでねえだよ。  
こらあ、ええ』ごちそう』だぬえ。これが食べた

くて南国まで行つたうちゆうに 向こうじゃあま  
り作らんのじゃのお。それだけが残念じゃわい。

はあ、ごちそうさん。で、あんたがモモかえ? モ  
ンローの弟子、うちゆう」

ももが大きな声で応えるのを、タケがわしの背ま  
で降りながら笑つとつた。

「そんで、そつちがハナか。ふふ。おおきゆうなつ  
たもんじゃのお」

首元に腰掛けて、ふたりを眺めてるのか? ええ  
い、降りんかこらっ!

「マジヨリカはええのお。子を成さん魔女にとつて、  
弟子はわが子も同じだあね。よっしゃ、よっしゃ」

そのままわしの肩に足掛けて、浮いてるももの頭  
を撫なでだしよつた。くっ! これじゃあ振り落とす  
わけにもいかんじゃろうがっ!!

「のおマジヨリカ、この子らに呼ばれたんも縁ちゆ  
うもんじゃる。ホネ折つちやるから、なんでも言ひ  
んさい」

\*\*\*\*\*

「それじゃあ、わしゃこれで。モモ、みやげありがとうな。魔女界のみんなで分けて食べさせてもらうでな」

魔女界への扉の向こうに、ももが急いで作ったチョコバナナをたんと抱えた、タケの小さな身体が消えていくのを、わしらは並んで見送ったんじゃ。

「沖繩、か」

ぱたん、と扉が締まると同時に、わしの口から言葉がこぼれた。

まるつきり予想外じゃったわい。盲点というやつじゃな。

日本ならこの美空町に、あといくつか。他にはアメリカのモンローがいた場所に、フランス、イギリス、ドイツ　とにかく、きつとMAHO堂の近くにあるのじやと、勝手に思い込んだわい。よくよく考えれば、リリカママだってMAHO堂の近く

にはおらんじやないか。

しかし、タケをもつてしても、確実と言えんとな。あやつら引き連れて行っても、無駄骨むだぼねになるだけかもしれん。が――

わしは少しだけ目をつむってから、あたりを見回してみた。

ももとハナの、なにか言いたそうな顔。ララの心配げな顔。そして　テーブルにはバナナ、か。

ふふ。久しぶりに、顔がほころんでゆくわい。そうじゃ、バナナで十分。十分じゃる、マジヨリカ

「電話じゃ」

「エ？」

わしは手をまっすぐ伸ばした。時計を見れば学校帰りの時間じゃからちようどいいわい。ま、ももとハナには1日サボらせてしもつたが。

「電話をよこさんか。どれみにはづきにあいこにおんぶ、全員呼ぶぞー！」

11 ほねおりバナナ

いいかげん、みなもイライラたまつとるじゃろ。どれ、わしも含めて、気晴らしさせてもらおうとするか。「ユメが居おらなんだら、みやげに山ほどバナナを買って、MAHO堂バナナフェアにでもするまでじゃ。よし、みんなでゆくぞ、沖縄じゃあつ!!」

—おしまい—